

●家族・個人が歴史の中で織りなす人間模様は、家屋の相貌を変え、創られた家屋は生活に秩序を与える。建築学と人類学の融合が解き明かす「住まい」の生態学。

家屋とひとの民族誌

——北タイ山地民アカと住まいの相互構築誌

清水郁郎 著

本書に通底する問題意識はふたつある。ひとつは家屋の変化への視点である。ある社会の家屋について考えるとき、その物質としての本性——家屋が形式を持つということとそれが変化するということがいかに重要であるか。それを、本書では一貫して示そうとしている。これをもっとも深いところまで掘り下げたのが、家屋の象徴分析であった。しかし、そうした分析の多くで家屋と人の関係は固定的に記述された。そして、人びとが生きる社会の現実と家屋の静態的、固定的なイメージは、どうにも折り合いがつかないことが次第に指摘されるようになっていった。

もうひとつの問題意識は、家屋を建設して住むという一連の過程がどのような意味を持つのかということである。北タイの山地で暮らすアカにとって、家屋はそれほど当たり前存在するものではなかった。家屋を建設することが幸運にもできたとしても、その土地の所有者とされる超自然的存在に土地を使う許可を求めなければならぬ。それには周到な準備とおこないが必要である。家屋が建ちあがった後は、その内部で集団としてどのように生きていくかが人びとの意識の焦点となる。子孫を残さなければ家屋は倒壊し、自身も祖先の一端に加わることができなくなってしまうからである。かくして、集団を維持するために、さまざまな方法が注意深く取られることになる。

家屋の建設は、人びとが「生きる」ことを意図してはじめられる。そして、家屋を維持するための終わりのない過程が続けられる。それは、人びとと家屋との相互構築的な過程である。同時に、人びとには積極的に社会にかかわる契機が生ずる。本書が提示しようとするところみるのは、人びとが真に「創造的」であるための場としての家屋なのである。(まえがきより)

●目次

まえがき
本書の構成

- 第一章 家屋のパススペクティブ
 - 第二章 生活の舞台1——ロウチの村落
 - 第三章 生活の舞台2——ロウチの屋敷と家屋
 - 第四章 女性——豊かさを運ぶ存在
 - 第五章 神話——家屋理解の知的道具
 - 第六章 霊的存在——空間を組織する鍵
 - 第七章 杵組みからの逸脱——ザンサンホ再考
 - 第八章 祭壇を捨てる
——「生き方」をめぐるキリスト教徒とロウチの議論
 - 第九章 結論と今後の課題
- あとがき
文献一覧
索引

体裁

・A5判・上製・カバー
・四三二頁

税込み定価

・八八二〇円
(本体八四〇〇円)

発行所 風響社

114-0014 東京都北区田端四一―四一九
電話〇三(三八二八)九二四九
http://www.fukyo.co.jp

注文書	
流通センター取扱品	
出版	発売
地方	風響社
	清水郁郎著
	家屋とひとの民族誌
	北タイ山地民アカと住まいの相互構築誌
	ISBN4-89489-701-6 C3039 ¥8400E
	TEL: 03-3828-9249
	税込み
	八八二〇円
	部

〔お客様控え〕

ご氏名
ご住所

お電話

月 日